

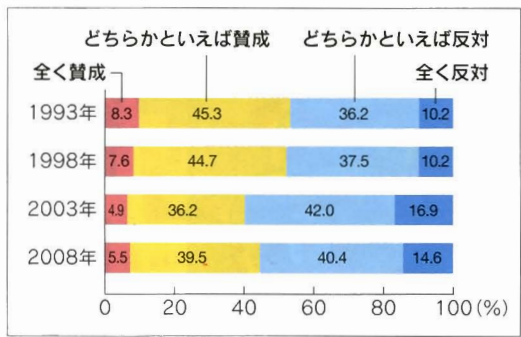
えているって本当?

To you

男女共同参画を考える
情報コーナー

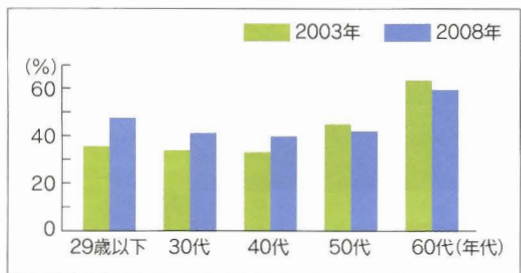
2010.11
[Vol.12]

「夫は外で働き、妻は主婦業に専念」への賛否 (1993年からの変化)



全国家庭動向調査より

賛成する割合 (20歳代~60歳代の変化)



全国家庭動向調査より

30代、40代でも増加している
専業主婦願望は29歳以下が特に顕著で、

専業主婦を望む女性が全国的に増えてきている。国立社会保障・人口問題研究所が既婚女性を対象にした「第4回全国家庭動向調査」(08年7月実施)で、「夫は外で働き、妻は主婦業に専念すべきだ」と考える既婚女性の割合が、93年の調査以来、初めて増加に転じた。共働きが当たり前で、働くことに意欲的と思われる福井の女性たち。彼女らの中にも専業主婦願望はあるのだろうか?

専業主婦になりたい!

福井市のAさんは結婚4年の専業主婦。大学を卒業し4年間、県内企業に勤めたが結婚後、出産を機に27歳で退社した。「夫は公務員だから、若いうちさえ我慢すれば将来は安泰。この先も真剣に働く気はないですね。以前の会社では、結婚後も働く女性社員はあからさまに戦力外扱い。仕事にもそれほど愛着を感じなかった。今は2人の育児に追われる毎日。夫は育児に協力的とは言いがたいが、双方の両親が困った時は助けてくれる。退社の時はさすがに悩んだが、子どもを預けて働く友人から仕事と家庭の愚痴ばかり聞かされると、自分の選択は正しかったと思う。「福井では子どもが小学校に入るぐらいになると、周りから『何で働かないの?』って言われる。それが恐いかな(笑)。でも再就職の条件は悪いし、それなら家にいる方がまし」。

しかし、片方だけの収入に頼る専業主婦は、実は「安泰」ではないと、福井大学の高田洋子教授は言う。高田教授は専業主婦でいられる条件として「夫が長生き

であること、離婚しないこと、失業しないこと」の3つを挙げ、不況の中「万が一の際に支え合える共働きは、最適なりす管理だ」という。さらに、女性が正社員として定年まで働いて得られる収入と、一旦やめて再就職した場合、生涯賃金に歴然とした差が生まれるのも事実だ。

憧れの対象

専業主婦願望は、既婚女性だけではない。29歳、福井市の独身女性Bさんは、「自分が働かなくてもいい収入がある相手なら、結婚して専業主婦になりたい」と言う。かつてはキャリア志向で、県外の難関大学も卒業した。しかし現在の職場では、自分が思っていたほどの評価は得られていないと感じている。「結婚は、今の自分にとっては『発逆転のチャンスなんです』。だから『流』といわれるような商社マンや医師のような、人から羨ましがられる職業の相手であることが、第一の条件。「結婚して専業主婦になりたい。でも自分の母親のように、家族の



専業主婦願望が増

世話に明け暮れる専業主婦はいや。」

2人の女性に共通しているのは、仕事への「やりがい」や「希望」を感じられないままに、専業主婦に「新たな夢」を求めている点だ。現実として、働く若者の数は増えているが、実態は派遣や契約など不安定な雇用も多く、勤労へのモチベーションが持ちにくい。県立大学の塚本利幸准教授は、仕事での自己実現が難しいことからこそ「願望」としての専業主婦が増えるのは自然な流れだという。

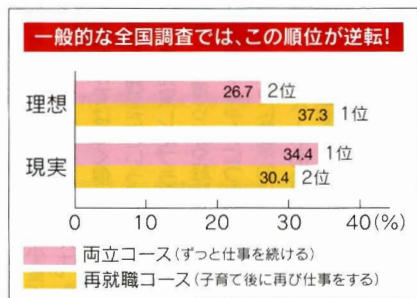
現実からの逃避願望？

塚本准教授は以前、県内の女性対象に、「女性の理想とするライフコース」と、「実際になりそうなライフコース」を問うアンケートを実施した。通常は、理想コースの1位は「結婚し出産する。仕事をもち続ける」で、次いで「結婚し出産する。出産で仕事を離れ、子どもが一定の年齢になったら再び仕事につく」が続く。そして「実際になりそうなライフコース」では、1位と2位の順位が入れ替わるのが普通だという。しかし福井県の女性たちは、理想コースの1位が「出産で一時仕事を離れる」。一般的な女性の願

望と順位が逆転していた。「共働きが当たり前」という福井の環境の中で、せめて子育て期間ぐらいいは労働から解放されたい、という女性の現実的な選択願望ではないか」と分析する。

同じ様に、物心ついた頃から経済が停滞していた世代では「ずっと働き続けたい」といけない。現実を自覚する一方で、強い専業主婦願望を持つというのだ。しかし現状では専業主婦は、安定して高給を得られるパートナーがいるごく一部のみに限られる。むしろ若い男性には、経済的事情から妻に働き続けて欲しいと考える人が増えているという。

県内女性の理想と現実のライフコース



福井県立大学 塚本利幸准教授らの調査より作成

働く主婦は、なぜつらい？

38歳で子ども2人、役所に勤めるCさんは、年輪的に責任を持たされる立場になりつつあり、気が重たいという。「夫に辞めたいと相談したら『そんなに思われた職場なのに』と逆に諭されました。頼めば夫は家事もこなしてくれるが、あくまで『手伝ってあげる』というスタンスを感じる。夫の会社では、残業などが頼みにくい既婚女性は歓迎されないらしく、『あの女性社員は、子どもが病気になると思うとすぐ会社を休む』という夫の不平等な聞きかた、自分のことを言われたような気になる。育児も取れるし思われていると思うていたが、子どもが病気の時、仕事を休んでいたのはいつも自分だった。『それならあなたが仕事休んでよ』と言いたくなる。

「会社としては君のような女性はないが、自分が、自分の奥さんと困るなあ、と上司に言われたことがあります」とは、40代の既婚女性、Dさん。雇用機会均等法第一期世代として、後輩たちの道づくりのためとも思って、必死で頑張ってきた。子どもは既に大学生となり、手がかからなくなつてはつとずする半面、離れ

てみるともつと育児に関わりたかつたという寂しさを感じる。子どもは、母親の仕事する姿が大変そうだったという理由で、専業主婦への憧れを持っているという。

夫よ、もっと協力を

福井県は共働きが多い一方で、男女とも性別役割分業に関する意識が根強く、特に男性の家事・育児への関与が非常に少ないという調査結果※がある。これは、同居・近居率の高さや保育施設の後機児童ゼロなど、恵まれた環境が後押ししている面もあるが、男性の男女共同参画への意識の低さの裏返しでもある。福井の兼業主婦たちは家庭での多くの負担を背負い、葛藤を抱えながら模索し仕事をしてきた歴史が透けて見える。頑張り続けている女性たちが疲れて、ふと人生を振り返り「もし働いていなければ」と考えるとき、母親の働く姿を見て「自分は同じようにできない」と考えるとき、専業主婦の立場は魅力的に映るよつた。

※男女共同参画社会の実現に向けて女性の就業と生活の質に関するアンケート調査(福井県民を対象に塚本准教授らが2009年に実施)



働く“充実感”を求めて 「仕事をしててよかった」女性たち



もちろん、共働きから「逃避」する女性ばかりではない。元々女性の就業率が高かった福井県。Eさん(33歳・既婚)は、「親も共働きだったし、結婚後も働くことは当然。仕事でも上を目指したいと思いつつ、夫も含め、周囲に協力してもらえ体制になっており、感謝しているともいう。派手な仕事はできないけど、仕事って、続けていく上でやりがいや充実感が徐々に生まれてくる。福井は子育てや通勤など環境的には働く女性に優しく、長く仕事を続けていける環境だと思つた」。

働ける喜び

1歳児から子どもを保育園に預けて働き始めた元専業主婦のFさん(30歳)は、家にいた2年間、社会から取り残されているような不安があったという。日中預けることで子育てが逆に楽しくなつたし、夫は以前より家事をするようになった。わずかも自分で稼いだお金があることは嬉しい。将来正社員になるという目標を持って頑張っている。

40歳代半ばのGさんは、「子育て時期は何度もやめたいと思つたけど、何とか続けてこられて今はよかつたと思ひます」。仕事をしていることで自信が持て、社会的に信用されていると感じることも多い。「特に大きかつたのは育児。リフレッシュできて、仕事への意欲が戻ってきた」。育児休業が普通に取れる社会になれば、多くの女性は辞めずにすむはずと言つた。

「ワーク・ライフ・バランス」がカギ

充実感を持つて、生き生きと働く女性たちに共通するのは、周囲の助けを借りながら、自己の生活をコントロールしてきたことだ。そのためには、女性だけでなく男性の意識改革が重要である。高田、塚本両氏とも口を揃える。そのカギを握るのが、仕事と生活の調和を意味する「ワーク・ライフ・バランス」だ。

ワーク・ライフ・バランスコンサルティングの会社を設立し、著書も多い小室淑恵さんは、ワーク・ライフ・バランスは、企業にとつただけではなく個人や家族にとつても重要な発想だという。「効率的な働き方によつて充実したプライベートを手に入れ、そこで得られる経験や情報が仕事での豊富なアイデアにつながります」。これにより、さらに効率的に仕事が進められ、よりプライベートの時間をしっかりと確保できるようになるとワークとライフの相乗効果が生まれるようになる。家事を通して養われた生活者の視点を商品やサービスに生かすことはもちろん、育児による時間的制約をきつかけにチーム・組織全体で働き方を工夫することは、今後両親の介護により多くの従業員が時間的制約を抱えることになるという点で、企業にとつても重要な視点だと言つた。

共働きの多い福井県でワーク・ライフ・バランスの考え方が浸透すれば、福井県は間違いなく男女共同参画の先進県になることができるのだ。

ワーク・ライフ・バランス代表取締役社長 小室淑恵さん直伝! 働き続けるための5カ条



その1 仕事の見える化・共有化

育児に伴う急な欠勤などでも業務に支障がないよう、日頃から自分の仕事をマニュアル化するなどして、見える化・共有化することが重要。時間的制約は誰にでも起こりうることをチームメンバーに理解してもらえるとすずめやすい。

その2 職場での協力体制を築く

ちょっとした時間に子どもの話をするなど、自然に自分の状況を知ってもらう。

その3 褒めて家事育児のできる夫に

どんな小さな協力でも上手にできた点を見つけ、夫を褒める。うまくできなかった点は「こうできたらパーフェクトだね」と添えて。パートナーのワーク・ライフ・バランス実現も視野に入れることが大切。

その4 ライフの環境を整える

家事のアウトソーシングを進めるなど工夫を。

その5 仕事への思いを発信

仕事に対する思いを、家庭や職場で話し、少しずつ理解を得る。

男女参画社会での“新専業主婦”

最近の専業主婦願望について、福井大学の高田洋子教授は、その中には働き方への新しい意識も含まれているのではないかといい、「まず前提として、専業主婦という概念自体があまりありません。会社には勤めていなくても、趣味の延長でお店や工房を始める主婦や、NPOや地域でのボランティア活動に似せしむ主婦は、家庭の外でも働いている。このような働き方を実践する人や望む人が増えているのでは

ないか。会社に勤め職場を持つて働くありかたに加え、地域のボランティアなどとして積極的に市民活動に参加するよう多様な社会参画のありかたもあり、それを新しい働き方として社会全体で評価するシステムも必要ではないかと高田教授は言う。「それには、会社への労働に対する対価としての賃金としてしか存在しない報酬のシステムを、社会全体で変えていくことが重要だ」と提言する。



配偶者やパートナーからの暴力に悩んでいませんか？

11/12(金)~25(木)は、「女性に対する暴力をなくす運動」期間です

殴る、蹴るだけが暴力ではありません。

暴力というと殴ったり蹴ったりという身体的なものをイメージしがちですが、心を傷つけられたり、生活する上で有害な影響が及ぼされるようなことがあればもちろんそれも「暴力」です。

あなたは悪くありません。

たとえ配偶者や恋人、パートナーであっても、あなたに暴力をふるうことは絶対に許されません。もしも、あなたが身近な人からの暴力で悩んでいるのなら、決して「私が悪いから…」などと自分を責めないでください。



デートDVって聞いたことある？

配偶者や同棲相手ではなく、交際している相手から受ける暴力のことを「デートDV」と呼びます。デートDVは中高生や大学生の間でも起こります。恋人に対し、暴力などの過剰な態度を示したり、逆にその態度を愛情だからと受け入れてしまったりしていませんか？

ひとりで悩まないで、まずは相談を!!

相談機関名	住所	電話番号	受付時間(電話・面接)
福井県生活学習館(ユニーアイふくい)	福井市下六条町14-1	0776-41-7111 0776-41-7112	火~日(9:00~16:45)
福井県総合福祉相談所女性相談課	福井市光陽2丁目3-36	0776-24-6261	月~金(8:30~17:15) 夜間電話相談(17:15~22:00/毎日)
配偶者暴力被害者支援センター 福井県健康福祉センター	福井健康福祉センター	福井市西木田2-8-8	月~金(8:30~17:15)
	坂井健康福祉センター	あわら市春宮2-21-17	
	奥越健康福祉センター	大野市天神町1-1	
	丹南健康福祉センター	鯖江市水落町1-2-25	
	丹南健康福祉センター武生福祉保健部	越前市文京2-13-39	
	二州健康福祉センター	敦賀市開町6-5	
	若狭健康福祉センター	小浜市四谷町3-10	
警察本部警察安全相談室	福井市大手3-17-1	#9110 または 0776-26-9110	電話(毎日24時間対応) 面接:月~金(8:30~17:15)

J-Win・ふくい女性ネット連携フォーラム

次のステージへのアプローチ ~一歩前へ進む働き方~(仮題)

- 日 時 平成22年11月20日(土) 13:30~
- 場 所 福井県立大学 多目的ホール
- 申込・問合せ先 福井県男女参画・県民活動課

※詳しくは<http://www.pref.fukui.jp/doc/danken/index.html>をご覧ください。



健康長寿の福井

福井県男女参画・県民活動課
〒910-8580 福井市大手3-17-1
TEL0776-20-0319 FAX0776-20-0632
E-mail danjoken@pref.fukui.lg.jp